
クリーンマン 6

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリーンマン6

【Nコード】

N2429D

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

あの行き当たりばつたりのヒーローが帰ってきた。汚い物や言葉に反応したら突発的に変身するヒーローが帰ってきた。今度はどんな迷惑を撒き散らすのか！抱腹絶倒の第6弾！

ええと、あれから、何ヶ月ですか？え？いや別に覚えているけどね。一応出だしなんでこんな感じかなと。

それはそうと、また始まるそうですね。第6弾ですか？

へえ、某有名海外ドラマもシーズン6だそうで。

別に狙ってやったわけではないですからね。

むしろ向こうのほうが狙ったと言っても過言ではないですが。

それにしても、普通は3部作とかじゃないですか？それがなんでこんなに続いているのですか？てゆゝか、俺自身は3部作のつもりで演じてきたはずですけどね。どこで食い違ったのでしょうかね。

そんなわけだから、今更引き下がることもできないですから。

てゆゝか、意地ですから。てゆゝか、もう既にいっぱい×2ですから。てゆゝか、作者の登場させる余地など作りませんから。

まあ、とにかく、俺は汚い物を見たり感じたりすると自分の意思とは関係なく変身してしまう正義の戦士クリーンマン！今回も思いつきり平和のために暴れるからよろしくどうぞ。

たしかアトラクションのバイトをしたと思うんだけど？え？あ、そういえばクビになったな。というか、覚えてねえっつゝの。

今はなんか大手外資系会社面接にきています。詳しくはわからないが、外資系ってしてたら凄そうジャン？偉そうジャン？俺もあんま詳しいこと知らないんだけどね。

面接官はギロリと独り言をいつている俺を睨んだ。

俺も負けじとギロリと睨み返した。

「じゃあ…とりあえず、志望動機でも聞こうかな」

面接官はお決まりの質問をしてきた。

「……別に……」

…と俺はどこかの女優が言っていた台詞を思い出したので言ってみた。

「…お前はどこかの女優か！」

面接官は怒鳴った。

「てゆくか、俺が志望したとかよりも、そちらがなぜ俺を採用するのかってことの方が大事じゃないっすか」

俺の訳のわからない言葉に面接官は目を丸くした。

「はあ？」

「それよりも俺はそちらのイメージキャラクターになるような気がしてならないのです」

ここから俺の攻撃開始である。

「俺は変身できるんです」

「じゃ、次の人」

「おいおいおいおいおい」

面接官はもう目を合わせてくれない。

「あのね、大の大人がよ？そんな変身とかさへ何言ってるの？って感じですけど？」

「俺は汚い物を感じると変身するのです」

「…へえ…」

「信じてないでしょ？」

「いや、信じてるよ、うん、信じますよ、ええ、だから、まあ、じやあ、次の人…」

「うおい！」

「えっと…どうしたいのかな？」

「変身するからさ、汚いこと言ってよ」

「そんなことは言えない」

「でも言わないと変身出来ません」

「うん、しなくていいよ」

「……」

3 時間後。

俺はまだ面接会場にいる。あれから動いていないのだ。面接官も呆れている。

「ちよつと、あなたねえ……」

「俺の変身を見てもらうまでは帰れません」

「いや、でもねえ」

「必ず、俺を採用したくなりますよ、俺の変身の姿を見れば」

「……」

面接官も苛々している。

「わかりましたよ、汚い言葉を言えば良いのですね」

「おおっ！お願いします」

「では……」

面接官はスウツと息を吸った。

「そもそもお前みたいなクソ野郎がこの一流会社を受けること自体おかしいんだよ！社会のそこらへんのところがおかしくなるんだよ！てゆーか、やっぱり今回も何も決めていないこの展開にいい加減呆れているんだよ！考えるとか言ってなかった？ねえ？ホンマにホントのホント行き当たりばったりでしょ？だから、そんなことじゃ、読者も受け入れてくれないんだよ！もうシリーズ6回目でしょ？そろそろ真面目に考えたら？この肥溜め野郎が！」

俺は震えながら涙が出そうになった。そこまで言わないでもいいじゃないか。途中別の話のように聞こえてきたが、そんなの関係ねえ！

汚い言葉だったか？そんな言葉あったか？マトモな批評じゃなかった？

あ、「クソ野郎」ってあったな、アレだ。

俺の身体が光り輝く！

「おおっ！」

面接官の驚いた声。

全身髪の毛まで緑色、胸には平仮名で「くりん」の文字、あ、これは「クリーン」って意味ね。汚い言葉に完璧反応！突発変身クリ

「インマン！参上！」

「おっおお…」

面接官の輝いた目。

「これが、俺の正体です。クリーンマンです」

自信満々に俺は言う。

「付け加えるならば、行き当たりばったりの話がいい味なんです」
適当にフォローする。

「そうか…」

面接官は笑顔満面な表情になった。

そして…。

「じゃ、次の人」

結局駄目かよ。ま、いいさ、今回は面接に慣れるってことが目的だったからな、外資系なんてどうでもいいさ。実は次の所がメインだったのさ、へへっ。

俺は次の面接現場に辿り着いた。そこは、HなDVDを売ってる地元の…。

「きゃあああ」

突然女性の悲鳴声が！きたああああ！これこそが俺の本当の活躍の場だ！

行くしかない！俺は悲鳴のした方向へ走り出した。

美人かな？女性は美人かな？

「どうしました？！」

俺が角を曲がって飛び出した。
すると。

男にナイフを突きつけられた美人の女性が顔面蒼白になっていた。

「たっ、助けてください！」

女性の叫び。

「くっ来るな！近づいたらこの女をこっ殺すぞ」

男はテンパってるのか焦っている。

こういう場合何をするかわかったもんじゃない。下手に手を出すことはできない。

「待て、落ち着け」

俺は両手を男に出しながら言う。これはとんでもない場面に遭遇した。

…あれ？今までこんな場面すらなかったのでは…？俺は人生で初めて、正義の味方として、クリーンマンとして、最高にして最大の状況に陥ったことを確信した。

「ねえ、ちよつと、なんとかしてよ！」

俺の薄ら笑いにム力ついた女性が言った。顔に出ているのか。この状況を解決したとなれば、俺の時代がまたくるはずだ。そんなことを考えていたら自然と笑みがでたのだろう。仕方ないことだ。

「うるせえ！黙ってる！」

男はナイフを握り直して凄んだ。

「ひいつ」

女性は頭を抱えた。

…とはいえこの状況だ。どうしたら良いものか…俺は緊張した。

「まず、男の気を逸らすために、『あつ！UFOだ』って言う作戦とか…」

「こらこら、聞こえてるぞ」

俺の独り言にちゃっかり耳を傾けていた男だった。

「あつ、UFOだ！」

「…馬鹿か貴様」

「アンタ馬鹿なの？」

襲われてる女性にまで言われるとは…。

最後の手段はコレしかない。これこそ救出において英雄扱いされるほどの覚悟である。

「その人を離せ！代わりに俺が人質になろう！」

俺は指差して宣言した。決まった。

「そうよ、それがいいわつ、ねえ、そうしましょう!」

女性は嬉しそうに言う。

男はジッと俺を見た。

「うーん、何かキモイからいいや」

「おい」

「それもそうね」

男と女は意見が合った。

「うおい!」

なんか酷くないか? 助けにきてやってるのにさ、キモイとかそういう問題じゃないだろうが。

……いやいや、キモくないから。

「じゃあ、好きにしろよ」

俺は呆れてその場から離れようとした。

「あつ、待つて、待つて、助けてよー、ごめん、ごめん」

女は必死で謝った。

最後は…そう、変身しかない。変身したところで能力は全然変わらないが、気分的に盛り上がる。

俺は適当に落ちているゴミを見つけた。道路を『汚して』いる! 気分が高まる!

俺の身体が光り輝く!

「なっ、なんだとおおお!?!」

男が驚愕の声を出す。

「なっ、なんですってえええええ!?!」

女が一応それに乗っかる。

全身が緑色に変化する。クリーンマン参上!

「世の悪をキレイに掃除する!それが俺クリーンマン!クリーンマン参上!」

高らかに俺は叫んだ。

「…で、どうすんのよ?」

冷やかな目で女は言った。状況は全く変わっていない。

「うん、変身しただけ」

俺も冷ややかに返した。

「でも大丈夫、俺には必殺技がある」

「まあ、そうなの！早くしてえ」

女は猫なで声を出した。

俺は咳払いをした。

「おい、貴様、こんなこととして故郷のおふくろさんが喜ぶと思うのか？馬鹿なことは止めてナイフを捨てろ！」

「…説得かゝい！」

男と女が一緒に突っ込んだ。

ところで歌でも出そうかと思ってレコード会社に行きました。きつとクリーンマンの曲は世界中で大ヒット間違いなしと思うからです。

レコード会社の人がいたので話しかけた。

「ああ、アンタの歌ね、そういえば、アンタの曲を作ってくれた神様のような人がいたけど」

「えっ？」

そうなのか？そんな人がいたのか！？

「ど…どんな曲なんですか？」

「えゝとねえ、The Life Forceっていうバンドだよ。HP検索してみなよ。その曲があるからさ」

てゆゝか、ホントのホントのホントの話だしゝ！

良い曲揃いなので是非聴いてみてください。

「Rebellion For The Believers」テーマ曲です。

………つて何を言ってるのだ俺は？

それよりも、ナイフ持った暴漢男だ！

………あ。そういえば…。男は警察が無事逮捕しました。良かった

た。良かった。…あれ？いいのか？

どういうわけか俺にサンタクロースの役をしないとオファーがきた。正確にはそういうバイト欄を探して、申し込んだわけなのだが。そろそろ食っていかないとホンマヤバイんです。

面接はなんなくクリアした。いじわるな担当者なくて良かった。汚い部屋じゃなくて良かった。変身することはなかった。え？いや、正体がバレたら不味いでしょ？だからだよ。別に変態扱いを恐がってるわけじゃないよ。

早速クリスマス会をしている幼稚園へ行くことになった。俺はサンタの格好をして出番を待つ。

「あつ、もしかしたら…サンタさんが来てくれたのかもしれないよお」

司会者の声が聞こえる。

「じゃあ皆、せゝのでサンタさんと呼んでみようかあゝ？」

「はあゝい」

可愛い子供達の声だ。

「せゝの！」

「サンタさゝん！…！」

今だ！俺は颯爽と飛び出した！

「やあ！皆！クリー…っ！、…サンタクロースだよおゝ！皆良い子にしてたかなあ？」

子供というものは無邪気であると同時に恐くて残酷である。

「…なんか…サンタ…汚くね？」

1人の子供の小さな声が耳に入る。その言葉に俺の身体が反応する！まっまずい！変身してしまう！ぐおおっ！身体が震えだした！変身を必死で我慢してるからだ。心ない子供の…ガキの発言が変身キーワードを押した。

今だから言っておくが、てゆうか、たった今気づいたので急遽報

告するが、変身する時に全身が緑になるわけだが、あれはその時着ている服を巻き込んで緑になるのだ。つまりサンタの衣装を着てようが、タキシードを着てようが、そんなの関係なく全身緑になってしまうということをシリーズ始まって初めてここに報告させてもらう。

「サンタ震えてるぞ」

「恐い」

「あゝ？トイレ我慢してるんじゃない？」

「えゝ！汚い！」

「キタナイぞ！サンタ！」

こつこら！これ以上…言っんじゃない！今日は親御さんも来てるんだぞ！ビデオ撮ってるんだぞ！

ああっ！駄目だあ！

俺の身体が光り輝く！

「おおっ！」

その場にいた全員の驚いた声。

全身髪の毛まで緑色、胸には平仮名で「くりん」の文字、あ、これは「クリーン」って意味ね。汚い言葉に完璧反応！突発変身クリンマン！参上！

静寂…。

「クリンマンサンタクロース！参上！」

俺は決めポーズをした！

数分後…

「出て行けえゝ！！！」

全員の見事な合唱が幼稚園内に木霊した。

あゝあ。最悪だ。

この変身能力のある限り俺はまともに仕事が出来ない。は仕事をしていたような気がするが忘れた。

変態扱いを受け、バイト代も貰えずに俺は肩を落として家路に着いた。道の途中で有り得ない人をばったり出会った。

「あら…」

宮下裕子だ。シリーズ2からのレギュラーキャラである。新聞記者で以前は俺のことを取材していたが、今ではすっかり呆れられ、殴られ、しかも結婚直前までいった仲なのだ。今回は出てこないと思っていたら突然現れた。

「なんだ？どうした？」

「せっかくのクリスマスもアンタどうせ1人だと思って、料理でも作ってあげようと気を回す感じの設定にされたのよ」

最後の言い回しが気になるが、とにかく俺は嬉しさに溢れた。

「そ…そうか、ありがとう」

素直に礼を言う。

「俺の部屋は完璧というほど綺麗だぞ！」

「でしようね、じゃないとアンタが大変でしょう？」

俺と宮下裕子はお互い笑った。ふっ、メリークリスマス。

数日後宮下裕子から料理代ということで莫大な請求書がきた。

……………はい？

クリスマスも終わり、今年もあと少しである。色んなことがあったなあ、会社と揉めたり、人が辞めたり、退職したり、転職したり…って誰の話だ？

俺は、実家に帰ろうと思ったのだが、両親のキャラや性格を忘れたのと確認するのもなんか面倒なので行くことを断念する…って誰の都合だ？

そんな時ニュースが飛び込んできた。年賀状を片っ端から盗んでいる悪党がいる！

よおし！今年最後の仕事だ！クリーンマン出勤！

俺は飛び出したのだが、あまりの寒さに再び家に戻る。

いや、シヤレにならんよ。寒いよ。うん、寒い。こんな日は悪党もわざわざ出てこないって。

いや変な誤解しないで下さいよ。別に書いている今の今急に何にも展開が思い浮かばなかったから止めたとかじゃないですからね。展開が変わるっていうのがそもそもこのシリーズの特徴っていうか、コンセプトっていうか…って何言わせてんの…！！

…同じようなネタ止めてもらえるか？…まあ、とにかく、良いお年を。

俺は今、警察に追われている。
クリーンマンのままで。

どういうことだ。有り得ない。どうしてこんなことになった？
年明けにお年玉を盗むという悪党が出た。

あ、念のためにいうけど、前回の年賀状を盗む奴とは違います。
奴は逮捕されました。

今年最初の事件だ！…と俺はちゃんと寒いのを我慢して飛び出したんだ。運良く犯人と出くわした。

俺は威勢良く変身した。

「変身！クリーンマン！参上！」

そしたら近所の人が警察を呼んでいて、俺の変身を同時に駆けつけた。犯人の男はなんと「あの男です！おまわりさん」と俺を指差したのだ。疑問にも思わない警察は俺を捕まえに殺到してきたのだ。スキを見て犯人は逃げた。

「あつ、あつちが犯人だ、ねえ、あつちだつてば！」

「うるさい！おとなくしろ！」

「ええ〜！うそ〜ん！」

…とまあこんな感じだ。年明け早々最悪だ。こうなるから家で大人しくしてれば良かったんだ。

「いたか？」

「いや、いない」

警察の追っ手が迫ってきた。

「いたぞ！」

「逃がすな」

「止まれ！」

「この緑！」

「ボケ！」

「アホ！」

「変態！」

「ハンサム！」

「もっと良く考えろ！」

「どうやってまとめる気だ！」

最後の方のよくわからない声を背に俺は逃げた。

逃げた。

逃げた。

逃げた。

逃げた。

捕まった。

「うわあ」

「確保お！」「犯人確保お！」

「ちよつ、違う！犯人じゃねえ！」

「黙れ！変態！」

警察は大人数で俺を押さえ込んだ。俺は捕まった。無実の罪で。冤罪だ。

捕まった次の日、いきなり裁判。…え？あ？あれ？は？ええ？なに？

無表情で裁判官は「死刑」と言い放つ。

「はあ…っておい！おかしいだろ！なんだこの展開！コラ！まっ…弁護士は？ねえ？弁護は？」

「実行は、1時間後」

げげっ！死刑は1時間後お？いや、いや、いや、ねえ、ねえ、待って！！！！！さっぱりわからない。

俺は目が覚めた。

「ゆ…夢かあ…」

なんだか読者の怒りの叫び声が聞こえてくるが気にしない。

読者のあるコメントで思いついたって気にしない。

夢だったんだもん。俺に罪はない。文句は作者に言ってくれ。

それにしても恐い夢でリアルだった。

…と俺の手元に大手外資系会社の面接で出す予定だった履歴書がある。…確か…駄目だったな。その後も駄目だったな。宮下裕子の申し出も断ろう、あんな額の請求はたまらない。その後も駄目だったなあ。

そっか、そっかそういうことか、これは予知夢だ。実に面白い。

つまり、もう家から出なければいいんだ。

うん、クリスマスも年末も正月も家の中でゴロゴロネット遊びしてればいいっていうことだ。

俺は満足してもう一眠りした。

次回のシリーズ7がちゃんとしたオチになりますように…と俺は神にお願いした。

クリーンマン6 完

（後書き）

・・・

なんすか？なんか言いたそうな顔ですね。

いいじゃん。夢オチ一回書いて見たかったんだもん。

とか言いながら、実は読者コメント見て時に決めたんですけどね。

えへ。

皆さん、すみません。（土下座）

ちなみに、僕の中での最終回は。一切無視して数日後普通に暮らし
ていて、逆ギレするというオチで終わらせる考えでした。

シリーズ6はこんな感じでした。そろそろシリーズ自体を完結し
るとの声も出てきてるのですが、それも1つの選択ですね。

ちなみに、最後はクリーンマン死ぬから。あ。言っちゃった。

ええと、今回は前回まで約5ヶ月以上経ってますね。

まあ、準備期間と言いたいですが、仕事辞めちゃって、環境が変
わってしまった時間がかかってしまいました。次回は春ころですか
ね。

終わりにするのかどうかはその時に決めます。

それでは皆さんまた会う日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2429d/>

クリーンマン 6

2010年10月8日15時46分発行